

◆【海員随想】二つの救命胴衣⑥ 石橋 正

「機関長、自力座礁する。全員を上に入れてくれ」

私は船長室に戻り、下着も靴下もすべて新しいものに替え、制服を着た。

隣の研究員室の技官に自分の救命胴衣を託し、機関室へ向かった。機関長は……

広尾港の東方、崖の切れた辺りの砂浜に狙いを定めて突っ込むことにしたが、ふと、機関長のことが気になり、操船を航海士にまかせて、激しく揺れる船内を機関室に降りてゆき、やっとのことで入り口にたどり着いた。そして重い鉄の水密ドアを開け、機関の騒音と熱気の底にいる彼を見た。操縦ハンドルの前に足を踏ん張って、たった一人立っている機関長は、真新しい制服を着て、白い覆いのついたデッキ帽のあご紐をきりりと締めていた。

彼もまた、救命胴衣を着けていなかったのである。あの少年船員に自分の救命胴衣を持たせてやったのは彼であった。彼はしばらくして、上のグレイティングの所に私がいるのに気がついたが、もう声を出して話をする必要もなかった。左手はメインエンジンの手すりを握ったまま右手を軽く上げ、指で丸をつくって私に微笑した。

「あいつ、俺と一緒に死ぬ気だな」と、そのとき直感した。

海軍上等機関兵曹だった彼、この船を愛し、エンジンを生きているもののように大切にしていた彼、私の方を一瞥しただけで、あとはまた計器盤の針の動きをにらんでいた。2人とも若く、怖さを知らぬ駆け出しの船長と機関長であった。

「乗組員を全員助けたい」それ以外のことはもう何も考えていなかった。巨大な追い波を真後ろから受けて、船は奔馬のように襟裳岬東側の砂浜に向けて突進していった。

「いいか、海岸に乗り上げたらすぐ船から飛び降りて、みんなまとまって高い所に向かって走ってくれ」と、一語一語はっきり切って指示したが、答える者は誰もいなかった。

ほとんどの者が膝を抱えてうつむいており、重苦しい空気がブリッジ内に満ちていた。正面に激浪を受けるより、後ろから波に押される方がはるかに震動は少なかったが、グーッと大浪の背に乗せられ、坂道を滑り落ちるように走るのは無気味であった。皆、無言。風と波とエンジンの音だけが聞こえていた。私は目をガッと見開いたまま、舵輪を握りしめて仁王立ちであった。

「海員だより」